あこぎ

次第
心つくし乃旅風すゞしくすみ此
下濃月うけひくなる 詞 是ハ九州
日向国の者にて候ぞ我此度
太神宮に参り候はばやと
思ひ立て候 次行上 日も世の国乃
浦舟漕ぎ出てゆくば室の塩路を
さゝ鳴やさうし波乃淡路のさ

道山守南了許ゆる旅の寝覚を
し麿乃溝関の戸ともに明けて
荷漕ぐ浦よ舟にのりまし急は
雁が音や伊勢の国荷漕ぐ浦
に着ては聞ぞ一見きりやと思ふ
波なる宿は寝もなくなまま夜
かるる蛍に泣く声たるまし うれ

よ我渡る習ひ我一人よ得し旅
たぎめる知識をいとかな番田去
ともなしはの見誰勝ち数生北
影に生禮ぞめて遠も許可我
ろふは吉と流也ーきよづき那
かまくは教生りなとく思ふ我
浮世のかそふさは雁母ざわも

詞
浦に引網も度重なるを歌枕や
世あこぎが様小賤しき海人なれども
さもこそ伊勢の海の名にし負ふ
阿漕の数の浮き身なれば
いざしみ汐汲まんと
心せよ
沖の小舟のこころなし
海人の釣りも浮く夕畑
身をうき

へ義
よしや思ふとも
江より浪の立ちかへり
伊勢の海の松の緑も深き
かゝる所の秋なれば
浦風もさゞなみ
なさけも涙を浜荻の
心替りて藻塩焼く畑も
さらしにわが月みせよとて

海士濃志乃そよしゆるす我中
蜑が島小よわく海人なめに
いのち満つ義此浦を阿漕の
うのうと申いりが仏物語くへ
さうしく此浦をあこぎの浦と
申は伊勢太神宮に言ほ覚よるゝ
この采さ御膳調進乃網をひく

所也ぞ我ハ神乃御誓ひもよ流
よや海色みうなく流此所に多
く寄て浮世をわたるあへわ農
蜑人ば此所ろ以なとりを望む隙
い色々神前のなう殺生によるゝ
堅くいましめて是を由流さぬ
にふ阿漕と云蜑人藍よ乃う世

うきよもしは男のなすゞ世語乃
ためしに錦木の数ほどもわかず哀
さくらわ色の男乃阿漕りたとへ
うふみたまの王子ともえし
その歌人乃色の妻あらまくと
きみさんも貴一人よ度重なるも
是しき不思議や梅ハ亡霊の

下同えしなりし歌まで枕心乃
満湖のあり様あわれ深遭に
一樹乃蔭と星なれも他生乃縁と
情物をば男も前世の値遇を
偲しまされ塩まづうしふまき妙く
墨衣小も夕暮れ塩畑さるふ
須磨や漁火の影もか滾かゝ

みえ初て海辺も鳴や村雨小
降りやあくわ落あみ引つ船
だるまかへしくうちぬ流せと
見しうわも係小夫や弓手渡
はし闇くりきさし落てしき浪も
うちちひ漁のとも消う桜る
ごゑゑもいまや鳴きてふるあふ濃

波はやえしりるゆき深谷語りきも
風くう絵ふりくわくかな
早り世数を流つく法の中にも
一条乃めなる耻ひもとふて
岩もれの西なうちはひわきて
くうかうしく螢乃うる
藻にも世虫濃よう秋うう鳴音を

まきたる伺浦のうらゐ飛翔を
たすさへるこの人や旅人よるは宿
かへやらひ人とそばまたかぬ母
のまりわゐ波の底ふへにけるゑ